

第74回全国中学校・高等学校ダンスコンクール 総評

ダンスコンクール実施委員長 八木ありさ

今回もたくさんの学校に参加して頂き、ありがとうございました。参加作品数は、高校グループ作品44作品、ソロ・デュオ17作品、中学30作品と、例年と変わらぬ盛況に、コロナ禍にあってもダンス教育やダンス文化の灯は消えていない！と、とても明るい気持ちになりました。

映像での審査に初めて臨む学校も多かったことと思います。普段練習をしている体育館などで収録していたとしても、作品が始まった瞬間に世界が変わり、皆さんの集中力や作品への想いを強く感じる審査会となりました。今回は会場で皆さんと交流ができませんが、審査員の先生方から頂いたお話を基にまとめた総評を、このウェブサイト上でお届けします。大会やダンス活動への取り組みを振り返り、今後役に立ていただければと思います。個々の作品に対する講評は別途お届けいたしますので、楽しみにお待ちください。

全体

審査員は「1.身体がよく訓練され、鍛えられているか」「主題にふさわしい表現が行われているか」「作品の展開・構成に工夫が見られるか」「作品全体が獨創性にあふれ、何らかの魅力があるか」「総合的な完成度の高さ」の5つの観点で評価をしました。

昨年から続く、活動時間が減っている状況をもとせず、全体に動きのレベルが高まっており、どの作品もとてもよく練習してあることがわかりました。世界を揺るがす社会問題から学園生活のひとコマまで、また芸術作品に取材したものや自然への賛歌など多様なテーマ設定が見られた中で、グループ作品は3～4分間、ソロ・デュオは3分程度で完結させるためにイメージの核を絞り込み、それを表現しようとする動きと構成・展開の研究をより深く行い、独自の世界を創り出した作品が、高い評価を受けていました。こうした作品では楽曲・効果音の特徴をよく研究しており、これを身体の使い方と入念に結びつけている傾向がありました。

映像審査となったことで、ダンスエリアからの距離が規定通りの位置ではあってもカメラの高さが群構成やその展開をつぶさに見せて、効果的となった作品もありました。体育館であっても、スタジオや舞台であっても、不用意な足音は作品の魅力を打ち消してしまいました。音楽選びは常に成否を分ける重要ポイントですが、今後増えるかもしれない映像審査にトライする際には、映像収録の際の音響についても、空間内の反響状況や音源からの直接入力方法（出品の規定に基づきつつ）などの研究が必要となってくるかもしれません。

中学校の部

- 良い作品にしたいという指導者の先生の頑張りや思いが透けて見えることがありました。テーマ選定、動きの研究を生徒たちが独自に行っている（と想像された作品の）場合には返って独自の発想が面白いと感ぜられる場合もありました。
- 全ての作品がよく練習してあり、のびのびと動くことができているのですが、モチーフ（主題）の動きにもう一つ工夫があると、作品がより輝くだらうということが多くありました。どこかで見たことのある動きから、一歩先に進める工夫をしましょう。そのためには良い作品をたくさん観賞して比較研究し、動きを見る目を養うことも大切です。

- 大きな人数のグループ作品では、人数構成に変化のあるシーンづくりも可能です。大人数のユニゾンの力強さ以外にも、得意な動きのタイプなどで少人数の場面を作ったり、全員で踊るにも空間構成（グループ配置）を工夫したりすると、作品のスケール感が大きくなったり、作品の流れにメリハリが生まれたりします。そういったことを作品テーマの表現に活用しましょう。
- 大きくダイナミックな動きでなおかつ揃った表現にするには、身体の使い方を研究することも大事です。背中や体幹の動きを鍛えることや、指先の使い方に敏感になることで、これが実現しやすくなります。
- 衣装を考案する際には、イメージを大事にしながらも、動きをいかす衣装、衣装がいきる動きを研究することが必須です。
- 映画音楽や定番の音使いが多い中で、面白い、あるいは刺激的な楽曲に出会って作品が構想されたのだろうと想像されるものもありました。

高等学校の部

- 大人っぽい作品が多い印象でした。
- その作品ならではの動きを見つけて追求できていた作品もたくさんありました。また、せっかく工夫して、ある所まではこだわりが積み重ねられてきたのに、後半に続かない、あるいは最後の最後に何処かで見た終わり方、というものもありました。
- たくさんのことを盛り込み過ぎて焦点がぼけてしまった作品や、テーマの（部分的な）動きにとられ過ぎてダンスそのものが置き去りにされそうな作品もありました。テーマそのものは大変面白くても、壮大すぎたり、抽象的すぎたりすると、作品としてのプロット（筋立て）や持っている身体・動きとの開きが大きくなってしまい、表現したかったことは伝わらずに終わるようです。発想を具体的な動きのフレーズにまで繋げていく、テーマを反映した動きの研究をしましょう。
- 素敵なフレーズや力強い表現が見つまっているように見えるのに、身体づくりが伴わないためにそれが活かされずに終わっている残念な例も多いようです。基礎練習は退屈に感じるのかもしれませんが、今を超えて新しい表現をする上でも、日々の鍛練を通して自由な身体、強い身体を手に入れてください。例えば、ダンスでは脚を上げなくてはならないから脚を上げるのではなく、この作品のここで身体中が思い切り天を指す表現がしたい、というときにそれが実現できる身体が大切です。
- あるフレーズを動き出す直前や動き終わりの不思議と生まれている無駄な瞬間、あるいは気持ちの途切れがあると、せっかく積み上げている作品世界を0にまで戻してしまい残念でした。じっくり見られる作品、目を離せない作品は、メリハリのある中にも一貫した集中力や統一されたトーンがありました。
- 音楽の研究では、表面的に聞こえている音だけではなく、深いところを流れる、無意識に働きかけるような音を捉えることや、無音の効果を十分に動きに生かすことができているところは、作品の完成度も高い傾向がありました。フェイドアウトなどの工夫をする際に、音が消え切るところまでの操作が丁寧に行われているところは、作品全体の作りも隅々まで丁寧でした。

ソロ・デュエット部門

- さすがにトレーニングが行き届いた、技術の高いダンサーが多かった印象です。しかし、どんなに高度なことができるかという技術の羅列となってしまうと、テーマの表現から遠ざかってしまった例がいくつかありました。どの作品にも出てくるような流行りの動き（大技）があるようで、見飽きてしまう危険もあります。またその逆に、動きのボキャブラリーが少なく、音楽の雰囲気と構造に頼ってしまっている例もありました。
- ソロ作品では一人の力で表現を届けようと思うあまりにダンサーの身体にずっと力が入り続けることがあり、そうした時には見る側は息が詰まります。間（ま）をとった、肩の力が抜けた動きがうまく使えると、スピード感の変化やメリハリとなってみずみずしい表現を生み出すようです。こうして身体の隅々まで呼吸が行き渡っているダンサー／作品では、技術と表現が融合し、見る側にもテーマの厚みが伝わって来るようです。
- 過去の芸術作品や歴史上の出来事、有名人名前をテーマやタイトルそのものにした作品が多かったけれど、その背景や内容そのものを高校生自身の力で咀嚼できていたか、が心配になりました。同様に、タイトルに工夫を凝らす努力を感じますが、あまりに凝りすぎた難しいタイトルや文字の読ませ方だと、観る側がイメージをわかせるべく興がそがれるということもあるようでした。コンクールでは解説文などが資料として用いられない場合もあるので、注意する必要があります。
- 作品の終結場面で、音と動きのフェイドアウトで情調が収まってゆくにはある程度の時間の長さが必要です。せっかく良い表現が続いていたのに、時計に追われて終わった感じがする作品もいくつかありました。動きを詰め込みすぎて不要な部分がなかったか、振り返りましょう。
- グループ作品部門とソロ・デュエット部門の両方で参加して下さった学校で、収録の際に、グループ作品のカメラ設置位置やズームのままだと、ソロ作品では遠く感じ、せっかくの動きが小さく、見えにくく感じました。

【最後に】

繰り返しになりますが、どの作品もしっかり取り組まれており、画面から皆さんの熱意や日頃の努力を強く感じた審査会でした。参加者の皆さんのダンス技術のレベルは年々高まっており、発想もどんどん豊かになっています。舞踊界の未来は明るいと感じます。今回のコンクール出品を通して得た学びを、ぜひ更なる成長に役立ててください。来年の11月23日を、一同心待ちにしています！